

原始仏教における輪廻並びに無始無明と触に関する考察

山 本 啓 量

一、原始仏教の縁起観は、五盛陰苦に帰せられる純大苦聚集の原本を尋ねて、その根拠を無明に置く十二因縁、愛に置く五支縁起、識に置く九支または十支縁起、その他六入、触、受等に置くものが挙げられる。これ等はすべて老死憂悲惱苦の本を求めたのであるが、その各々の特殊性を考察したい。

イ、六入や受に根本を置くものは、触を本とする *Dasasamulaka* 縁起に還元する事ができる。六入は六内入処であり、六根を意味する。六根によって六境が予想せられ、「根境に縁つて識生ず、根境識三事合して触あり。」「触に縁つて受あり。」「触俱なつて受あり。」と称せられ、六内外入処は触構成の必然的根本資料であり、受は触俱生であるからである。又識を本とする縁起は、「識に縁つく名色有り、名色に縁つて識有り。」とせられ、識⇄名色の図式によつて、識名色の無限相関性を示すのみならず純大苦聚陰の無限存在性を示している。また雜阿含には「無明に覆われ愛縁に繫せられて此の識を得。身内に此の識有り、身外に名色あり、此の二因縁もて

触を生ず^③。」とあり。これは識⇄名色⇄触によつて図式する事ができて、識を本とする縁起も亦、触を本とする縁起に還元することができるのである。

ロ、人間存在は五蘊を以て表現せられ、色受想行識は識と名色とに相当し、五蘊はその儘識⇄名色の関係を示している。また「触俱ないて受想思あり。」と云われ受想思が認識事実であるから、触は認識の成立を示すと共に存在の義をも有するのである。また「触に縁つて受想思愛あり。」と云われる。愛を本とする縁起も触本の縁起に帰せられる。

人間存在はまた億波提 *upadhi* によつて表現せられることがある。サンユッタ因縁相応には、「世間に老死を生ずる各種の苦、この苦は億波提を因とし *upadhi-nidānam* 億波提を集とし *upadhi-samudayaṃ* 億波提を生とし *upadhi-jātikam* 億波提を起とす *upadhi-pabhavaṃ* 億波提は愛を因とし愛を集とし愛を生とし愛を起とす。」とあり。老死を知ることとは億波提を知ることであり、億波提は愛に縁るとして、「愛⇄億波

提↓老死苦」と云う縁起を説いて愛の生起は「触↓受」に縁るが、眼耳鼻舌身意の六内処において、常・樂・我・無病・安穩なりと見るところに愛の増長 *padhuna* があるとしている。愛は六内入処における接觸關係すなわち内触における中間触知 *antarāhi-sammasati* によつて起り、この愛を基体として億波提を生じ、億波提に縁つて生老病死憂悲苦惱を生ずることになる。この生起事実を愛↓取↓有↓生↓老死の縁起次第と比較する時、億波提は愛と老死の中間の取↓有↓生の三支に相当する。すなわち五取蘊を億波提と称した事になる。

ハ、雜阿含やサンユッタに、「無明に覆われ愛縁に繫せられ」「無明触に触れられて愛生ず」等と云われているのは、愛を本とする縁起は無明に基づくことを示したのであるが、唯、無明と愛との相連は、無明 *avijjā* は認識論的であり愛 *taṇhā* は存在論的であることである。無明は不知なりと云われ、五蘊や六入の無常苦無我なるを知らない事である。

二、原始仏教の縁起觀をこの様に考察するとき、六入や受を本とする縁起は触を本とする縁起に帰せられ、識を本とする縁起は、識↓名色は触なりとせられているので、此もまた触を本とする縁起と云うことになる。愛を本とする縁起は無明を本とする縁起に帰せられるが、無明も愛も触に縁つて生ずるとせられているから、原始仏教の縁起觀は、すべて触を本とする縁起に帰せられるのである。

諸の触は諸の縁起を示すと雜阿含やサンユッタに示されているので、三事相合の触は「此有れば彼有り云々」の縁起の相依相関を示しており、この相關事実を如実に知見するか否かによつて、煩惱や苦惱の生滅が有るとするのが原始仏教の本旨である。けれども純大苦聚陰の原本を尋ねて、無明や愛に至つた時は、触における特殊性に至つたことを示すのである。無明や愛は触の特殊状態を表現しているからである。苦陰の原本を触に帰せしめるときは、触の一般的根本性に連つたのであるが、この触は苦の因としての特殊な触とも考えられる。唯、触の如実の正觀のみが触の一般性を現わすのであって、この触の正觀によつて苦聚陰が減するのである。

触に縁つて貪瞋癡の三毒の根本煩惱が生ずるとせられる。一般性を根底とした触に縁つて生ずるから、根本煩惱の意義を現わすことができるのである。貪は欲によつて獲得せんとし、瞋は欲を満足し得ない事によるのであるから、貪瞋は渴愛に接せられる。また貪瞋癡は貪瞋無明とも称せられ、増一阿含には無明を癡に置きかえて癡に基づく十二因縁が説かれている。従つて煩惱や苦惱の根本は触にありと称せられるべきであるが、具体的には無明に有りとせられ、また渴愛にありせられると云うことができる。仏教における認識と存在の問題を考察するとき、触は認識と存在の根底にあり、認識と存在とは相表裏して触の中に接せられ不離の關係にあるので

あるが、具体的表現の爲には無明または渴愛に依らざるを得ないのである。

煩惱や苦悩の原本を求めて無明や愛に至るとき、その煩惱や苦悩の滅尽の爲には、無明や愛は触に縁つて生ずるとせられるから、触の正観や如実知見が重視せられ、八正道の実践は触の正見に基づいて第四禪における正定の成就に至つているのである。第四禪は触の正観の完成を意味する。

三、煩惱や苦悩の原因を求めて愛や無明に至る時、或は触や識名色に至る時は、其等の体系は一応完成している筈である。愛を本とする縁起はあくまでも愛に止まるべき筈である。愛の本を無明に移行するならばその特殊性を失ひ、触に移行する時は愛の特殊性は触の一般性に転化するのである。愛の特殊性や無限性を維持する爲には、愛自身によらねばならない。愛の無限性を維持し愛を増長せしめるものは、六道輪廻や三界流転の原因と云わねばならない。増一阿含等には、「愛有れば受 upadāna あり、受あれば即ち愛あり、因縁合會し、然る後に相生すること此の如し。是の如く五盛陰は断絶の時有ること無し。」とあり。愛¹²取の図式を以て示される相互循環關係を示して、五盛陰の無限存在を説いている。またサンユッタ諸天相應には、「渴愛は人をして生れしむ。衆生輪廻に墮す。」とあり。渴愛が輪廻転生の根元であるとしている。

サンユッタや雑阿含には「無明触所生の所受触るれば avi-jāsamphassa-jā-vedayitva 渴愛生ず。」¹³「無明触れて愛を生じ、愛を縁じて行を起す。」とあり。渴愛の本を無明に置けば、愛の特殊性は無明に移行せられ、無明の本を触に置けば、無明の特殊性は触の一般性に融合せられる。無明の特殊性を維持せんが爲には無明の無限循環性を認めざるを得ない。

M. N. 正見経には、十二因縁における無明生起の原因を求め、「無明の集より漏の集あり、無明の滅より漏の滅あり。」とし更に「漏の集より無明の集あり、漏の滅より無明の滅あり。」とあり、無明¹⁴漏の相互循環關係が図示せられるのである。雑阿含の不知経や無明経には無明義を説いて「無明とは知らざるなり。」¹⁵とあり、原始仏教の解脱涅槃の契機を「我が生已に尽き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知る。」¹⁶におけば、後有¹⁷を受けざるを知る。とは無明を滅尽して流転輪廻を脱することに外ならない。原始仏教の知るは五受陰や六入処の無常苦無我を知る。ことであり羅睺羅経では更に触の滅を知ることを増上法としている。

雑阿含には漏の生起について、「汝等应当に根門を守護して善く其の心を摂すべし。若し眼もて色を見ん時も色相を取ること莫れ、随形好を取り増上執持すること莫れ。若し眼根に於て摂斂せずして住せば則ち世間の貪愛不愛惡不善法則ち其の心に漏る。」¹⁸とあり。貪瞋癡の三毒は眼根において色相

に取するによつて、其の心に漏るとしている。サンユッタや雜阿含には云何に知見すれば漏尽を得るやを説いて、「諸陰を觀察し、勤めて欲し樂い念い信じて、三十七道品を實修すれば諸漏を尽すを得ん。(取意)」とあり。これは五陰六入の正見に基づく三十七道品を修して諸漏を尽す事を述べて、無明の滅は漏の滅なる事を強調したのである。

四、苦の生因を尋ねて無明に至つた十二因縁は、無明 $\uparrow$ 漏によつて輪廻の無限性としての無始無明を表現し、愛を本とする縁起は、愛 $\uparrow$ 取によつて輪廻転生の義を表わし、識を本とする縁起は識 $\uparrow$ 名色によつて人間存在の無限性を明示したのである。無明や愛の滅尽は純大苦陰の滅尽を意味するが、無明や愛の滅尽の方法または滅尽の根拠を示さねば、解脱の義を明らかにしたとは云えないのである。識 $\uparrow$ 名色を本とする縁起における識や名色は触の義を現わすと共に、この識は五取蘊の中の取 upādāna に基づく識であり、識住の識でなくてはならない。解脱や涅槃は如来施設の五陰六入等の正見に基づく正定八正道の修習によるとするならば、識 $\uparrow$ 名色は触であるとせられるのであるから、解脱涅槃の根拠は広義の一般性を意味する触の正観に置かねばならない。

雜阿含には、無明と愛と触との三者の相互連関による輪廻の相を示している。これは無始無明義の根本を示すものであると云わねばならない。其によれば「眼は有因有縁有縛な

り。眼は業の因、業の縁、業の縛なり。業は愛の因、愛の縁、愛の縛なり。愛は無明の因、無明の縁、無明の縛なり。無明は不正思惟の因、不正思惟の縁、不正思惟の縛なり。不正思惟は眼と色とに縁りて不正思惟を生じ、癡を生ず。彼の癡は無明なり。」とあり。眼の因を次第して尋ね、眼と色とに基づく不正思惟に至つてゐるが、眼 $\uparrow$ 業 $\uparrow$ 愛 $\uparrow$ 無明 $\uparrow$ 不正思惟 $\uparrow$ 眼の循環図式を以て示されている。眼の主体性は常に色の対象を予想せられるから、眼は眼触を意味するものとすることができる。愛による業は取であり、愛取は同時存在である。不正思惟は無明を生ずるも、これまた無明と同時に連つてゐる。従つて眼 $\uparrow$ 業 $\uparrow$ 愛 $\uparrow$ 無明 $\uparrow$ 不正思惟 $\uparrow$ 眼の系列は、眼(触) $\uparrow$ 愛 $\uparrow$ 無明 $\uparrow$ 眼(触)の循環図式を以て示される。

無明は眼によつて生じ、無明によつて愛を生じ、愛によつて生ずる眼の認識の相を規定するのである。無明は主体存在を原因的に規定し、愛は主体が取る対象の存在を結果的に規定するのである。眼の因は業に有りと云う事は、愛所生の為作性が眼の在り方を規定することを意味するのである。触に縁つて無明を生じ、無明に縁つて愛を生じ、愛が触の有りを規定する循環図式により、輪廻転生の根拠たる無始無明義が明示されている。染悪と清浄とに通ずる触の正観は、染悪を觀じ浄相を取得し解脱へ至らしめる根拠をなすのである。